第２回　中日理論言語学研究会

2005 年 4 月 24 日

擬態語動詞の語彙概念構造

影山太郎
関西学院大学

要旨：従来の動詞研究が語彙的な動詞を扱ってきたのに対し，「うろうろする，きょろきょろする」のような擬態語動詞を取り上げる。擬態語動詞の意味は，擬態語（うろうろ等）の意味内容が主動詞「する」の語彙概念構造の鋳型に補充されて，一人前の語彙概念構造が形成される。理論的に，この語彙概念構造による分析のほうが Tsujimura の構文文法のアプローチより妥当であることも論じる。

１. 言語の形と意味

擬態語は，言語における形と意味の対応という観点から理論的にも興味深い性質を持つ。

●一般言語学の観点から見た言語における形と意味の対応

(1)　Polymorphism (Pustejovsky 1995)
　a.　monomorphic languages（単一形態単一解釈型の言語）：１つの語彙項目に１つの意味しか持たない言語。形態と意味は常に一対一に対応する。
　b.　weakly polymorphic languages（制限付き単一形態複数解釈型の言語）：(a)と(b)の中間で，単一形態が，何らかの制限内で複数の意味と対応する。
　c.　unrestricted polymorphic languages（無制限の単一形態複数解釈型の言語）：１つの語彙項目が表す意味は無制限に広がっている。具体的な意味解釈は，その語彙項目が使われる個々の語用論的文脈によって決まる。

Pustejovsky によれば，世界中の言語は，厳密な意味で(a)型でも(c)型でもなく，すべて(b)型に属する。

しかし，(b)型の中でも，言語による違いがある。

(2)　Logical metonymy construction (Pustejovsky 1995)
　a.　She began a cake. = 'She began to bake/eat a cake.'
　b.　He began a book. = 'He began to read/write) a book.'
　c. *彼女は｛ケーキ／本｝を始めた。

(3)　移動構文
　a.　He walked to his office.
　b.　彼は会社に｛*?歩いた／OK 歩いていった｝。

(4)　結果構文
　a.　She pressed the dough flat.
　b.　彼女はパン生地を平たく｛*押した／OK 押し延ばした｝。

(5)　動詞の名詞化
　a.　a bite（行為：噛むこと，個物：噛み傷）
　b.　噛み（行為：ひと噛みする，＊個物）

大雑把な傾向として，
・英語は，polymorphism の度合いが大きい
・日本語は，polymorphism な度合いが小さい（しかし，中国語ほどではない？）

擬態語・擬音語にも同じような違い

(6) a.　He laughed/chuckled/smiled/giggled/simpered/guffawed/grinned.
　b.　彼は，にこにこと／くすくすと／げらげらと／にたっと笑った。

(7)　a.　The train roared by.
　b.　列車はゴーっと（いって）通り過ぎた。

●語彙意味論の理論から見た統語構造と意味構造の対応関係

(8)　"what enables the speaker to determine the syntactic behavior of a verb is its meaning" (Levin 1993:4).

例えば，動詞の使役自他交替

(9) a.　使役変化を伴う動詞は基本的に有対
　　煮る－煮える，曲げる－曲がる，建つ－建てる
　b.　使役変化のない動詞は基本的に無対
　　たたく－＊，くすぐる－＊
　c.　押す－ *押さる，判を捺す－ 捺さる，捺ささる

「統語と意味の対応」が概念的意味を持つ通常の語彙動詞には成り立つとして，語彙的な意味を持たない動詞の場合はどうなるのか？　と言っても，「きのう彼は家でパピプッた」のように全く無意味な動詞では文の意味解釈ができず，従って統語構造も判定できない。

☞ この疑問に答えるために，明確な概念的意味がないとされる擬態語動詞(mimetic verbs)を調べる。

(10)　擬態語
　　うろうろ　　する
　　擬態語動詞

問題：「擬態語＋する」の意味構造はどのようにして得られるのか？　その意味構造は普通の動詞の語彙概念構造とどのように違うのか／同じなのか？

本稿の結論：「する」は意味構造の鋳型を，擬態語は具体的な意味内容をそれぞれ分担して受け持っている。「擬態語＋する」全体の意味構造は，「する」が持つ語彙概念構造の鋳型に，擬態語が表す特定の意味内容を組み込むことで得られる。その結果，「擬態語＋する」全体の意味構造は通常の動詞の語彙概念構造と実質的に同じになる。

２. 擬態語の語彙的性質

擬態語は特殊なものではなく，一般の語彙項目と同じような性質を持っている。

● Kita (1997)：通常の動詞が分析的な意味を持つのに対して，擬態語・擬音語は感覚・知覚・運動神経・情動などの生理的・心理的情報に直結した“affecto-imagistic”な意味を持つ。

● Tsujimura (2001, to appear)：擬態語の意味は不明瞭であり，明確に特定できない。擬態語動詞の意味はその動詞が用いられる構文から理解される。

(11) a.(?)ドアの取っ手がブラブラする。
b. (?) 足をブラブラしないで座りなさい。
c． 公園をブラブラした。(Tsujimura 2001)

擬態語は本当に概念的意味を持たないのか？

☞音韻，統語範疇，意味において，擬態語は一般の語彙と同等の性質を備えている。

2.1. アクセントと統語範疇

Tsujimura (2001, to appear)は，擬態語は統語範疇がないとするが，しかし：

(12) 動的な擬態語は第一モーラにアクセント。(「動的」とは時間と共に動作や状態が推移すること)
a. 副詞用法： GOrogoro (to), ZUkizuki (to)
b. 動詞用法：GOrogoro suru, ZUkizuki suru

(13) 動的でない擬態語はアクセントを持たない。
a. 形容詞用法：gaRAGARA-da, neBANEBA-da
b. 名詞用法：hiRAHIRA, gaRAGARA（おもちゃ）

2.2. 個々の擬態語による品詞の限定

(14) とんとんTONTON（「調子よく」の意味）
a. 副詞：彼はとんとんと出世した。
b. 動詞：*彼はとんとんした。
c. 形容詞：*彼の出世はとんとんだ。
d. 名詞：*彼のとんとんが／を...

(15) とんとんTOnton（「たたく」という意味）
a.. 副詞：ドアをとんとんとたたく。
b. 動詞：お父さんの肩をとんとんする。
c. 形容詞：*とんとんだ。
d. 名詞：*とんとんが／を...

(16) とんとんtonTOn（「同じ程度」という意味）
a. 副詞：*彼はとんとんと商売した。
b. 動詞：*商売はとんとんした。
c. 形容詞：差し引きはとんとんだ。
d. 名詞：とんとんが／を...

2.3. アスペクトなどの意味的性質

(17) a. 彼女は｛一瞬，ニコッとした／*会議のあいだずっとニコッとした｝。
b. 彼女は｛一瞬，ニコニコッとした／?会議のあいだずっとニコニコッとした｝。
c. 彼女は｛?*一瞬ニコニコした／会議のあいだずっとニコニコした｝。

2.4. 格の選択

(18) a. 彼は上司｛に／*と／*を｝ペコペコする。(cf. ～におじぎをする)
b. 彼はガールフレンド｛と／*を｝いちゃいちゃしていた。(cf. ～といちゃつく)

「する」単独では，このような格をとらない。

(19) *彼は上司にする。
*彼はガールフレンドとする。

2.5. 主語や目的語に対する意味制限

(20) a. 駐車場代に1200円もかかって，母はぷっつんした。(ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ例)
b.?ドボルザークのチェロ協奏曲第３楽章でソリストの弦がぷっつんした。(ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ例)

(21) a. それで，お母さんはどうしたの？ (Experiencer)
→(20a) 母はぷっつんした。
b.*それで，弦はどうしたの？ (Theme)
→(20b) 弦はぷっつんした。

(22) a. ネズミが台所をチョロチョロ走っている。(Agent)
→ネズミが台所をチョロチョロしている。
b. 雨水が溝をチョロチョロ流れている。(Theme)
→ *雨水が溝をチョロチョロしている。

しかし後で見るように，擬態語動詞の主語はいつでも有生名詞であるとは限らず，擬態語によって制限が異なる。

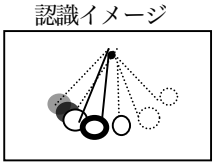
∴擬態語は，通常の語彙項目と同等の，意味的・統語的性質を持つと考えられる。

3. 擬態語と動詞「する」のコラボレーション

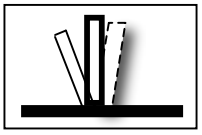
擬態語動詞は特別なものではなく，その意味は擬態語の意味と「する」の意味を合成することで決まる。この分析が正しければ，擬態語動詞は，語彙概念構造の理論を補強することになる。

3.1. 擬態語の認識イメージ

(23) a.「ブラブラ」の認識イメージ　b.「グラグラ」の認識イメージ



上から吊されたものが振り子のように揺れる。



根元で固定された物体が，固定が緩んで揺れる。

・擬態語そのものが何らかの意味を持つとすると，その意味をベースにして，擬態語動詞全体の意味・用法が予測できるはずである。

(24) a. 主語に意図性がなく，一点に固定されたぶらさがり状態のときは → (11a)
b. 主語が意図性を持ち，一点に固定されたぶらさがり状態をコントロールできる → (11b)
c. 主語が意図性を持ち，そのおおもとは比喩的な意味で一点に固定されているが，その範囲内で主語そのものが位置を変える（移動する）とき → (11c)

(25) 認識イメージから言語の語彙へ

3.2. 語彙概念構造（ＬＣＳ）

● LCS の構成（影山 1996）

<u>LCS template（LCS の鋳型ないしスキーマ）</u>

意味述語とその項・補部を構造化した**鋳型**

（Grimshaw (1993)の意味構造 semantic structure）

(26) 下位事象

a. 状態，静止

[STATE y BE AT-z]

(z は物理的位置ないし抽象的状態)

b. 変化

i. 発生，出現

[EVENT BECOME [STATE y BE AT-z]]

ii. ある状態から別の状態への変化

[EVENT y BECOME [STATE y BE AT-z]

iii. 移動

[EVENT y MOVE VIA-z]（VIA-z は移動の道筋（中間経路））

上位事象

c. 活動

i. 自立的活動

[EVENT x ACT]

ii. 他者への働きかけ

[EVENT x ACT ON-y]

d. 経験

[EVENT x EXPERIENCE [...]]

e. 使役

i. 直接的な操作使役

[EVENT x CONTROL [...]]

ii. 間接的な使役，因果関係

[EVENT x CAUSE [...]]

(27) 上位事象と下位事象の組み合わせ

a. 使役変化

[EVENT x CONTROL [EVENT y BECOME [STATE y BE AT-z]]] (e.g.芋を焼く)

b. 意図的な移動

[EVENT x CONTROL [EVENT x MOVE VIA-z]]

(e.g. 大通りを歩く)

●LCS と統語構造との結びつけ規則

上の LCS 鋳型において，x が統語構造の外項（主語位置），y が内項（目的語位置）に対応する。

LCS content（LCS 内容）

個々の動詞が含意する具体的な動作様態など（Grimshaw (1993)の**意味内容** semantic content）

(28) 細かい動作様態が構文の適格性に関与する。

x ACT<Manner>

a. 大関が横綱を｛突き倒した／押し倒した／*さわり倒した／**触れ倒した｝。（影山2005）

b. The soldier {knocked / struck / ??hit / *touched} the civilian dead. (Boas 2003)

擬態語が表す意味内容

(29) a. 手触り：ざらざら，つるつる

b. 心理状態：がっかり，はらはら，ほっ（と）

c. 生理的作用：どきどき，ちくちく

d. 音声：どんどん，ふうふう

擬態語の LCS content

(30) ・ぶらぶら : MOVE<Manner: SWAYINGLY>

・あくせく: ACT<Manner: BUSILY>

・あっさり : STATE<Manner: SIMPLE AND LIGHT>

3.3 擬態語動詞の統語構造

これまで「擬態語動詞」と呼んだものは，厳密に言うと，形態的・統語的には一単語ではない。

(31) a. サエやモなどの副助詞を挿入できる。

ネズミがちょろちょろサエしていた。

b.「擬態語＋する」の「する」だけを削除できる。

それを聞いて，父はあたふた，母はおどおどするばかりだった。

このように「擬態語＋する」は形態的には複合語になっていないものの，意味・機能としては，「擬態語＋する」全体が 1 つの述語（**合成述語** composite predicate）と見なされる。合成述語というのは，英語で言えば，take a look at it，give him a push のような表現。

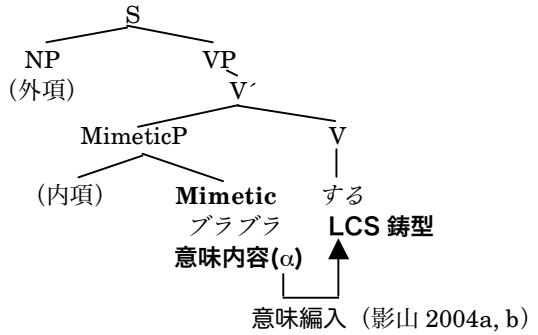
(32) a. 擬態語動詞の中の擬態語は単なる副詞ではない。副 詞なら省略できるはずだが，この場合は省略できない。

高校生が繁華街を *(うろうろ) している。

b. 補部（目的語など）は，「する」ではなく擬態語によって決まる（選択される）。

高校生が繁華街を｛うろうろ／*あたふた｝している。

(33) 擬態語動詞の統語構造



擬態語動詞の合成的な意味解釈

A. 擬態語そのものは行為(ACT)，動き(MOVE)，変化(BECOME)，状態(STATE)などの概念に伴う特定の様態を表す単語として辞書に登録されている。

B. 擬態語動詞としての「する」は，[x ACT …]や [x CONTROL […]]のような不完全な LCS 鋳型を持ち，未指定の部分は擬態語から補われる。

C. 擬態語動詞（ブラブラする）全体の意味は，擬態語（ブラブラ）の意味構造（α）を「する」の LCS 鋳型に組み込むことによって得られる。

4. 擬態語動詞の分類と概念構造

(34) **擬態語動詞の分類**

A

Type 1：一家のあるじは毎日，あくせくする。

（主語が意図的に活動する）

Type 2：母親が赤ちゃんの背中をトントンする。

（主語が対象に働きかけを行う）

Type 3：旅行者が観光地をうろうろする。

（主語が場所を意図的に移動する）

Type 4：私は試験の結果にがっかりした。

（主語が心理的状態の変化を被る）

B

Type 5：頭がズキズキする。

（話者が身体部分の異常な動きを感じる）

Type 6：椅子がグラグラする。

（人が物体が異常な動きを感じる）

Type 7：スープの味があっさりしている。

（物体が何らかの性質を持っている）

本稿のデータ：「～する」という形の擬態語動詞を辞書（阿刀田・星野 (1995)，Kakehi, Tamori and Schourup (1996)）およびインターネットから収集し，意味用法によって７種類に分類した。

●A グループは，典型的に人間名詞を Agent または Experiencer として主語にとる非能格動詞ないし他動詞
●B グループは，典型的に無生物を変化対象(Theme)として主語にとる非対格動詞

たとえば，A グループは命令形（～しなさい，～するな）にできるが, B グループはできないといった違いがある。

A グループ

Type １：あくせくする。[活動動詞]

特徴１：自動詞で，主語の継続的な行為・活動の様態を表し，状態変化は含意しない。

(35) あくせく（そんなにあくせくするな），あっぷあっぷ（水の中でアップアップした），ぶらぶら（一日中，家でぶらぶらしている），がつがつ（そんなにがつ がつするなよ），ぐずぐず（ぐずぐずしないで！），へらへら（へらへらするな！），いそいそ（初めてのデートでいそいそしている），こせこせ（こせこせするな），しっかり（しっかりしなさい），もじもじ，のんびり，じたばた，もたもた，うかうか，おずおず

特徴２：このタイプの擬態語は，動作様態を表す副詞として使われることが多い。

(36) あくせく働く／がつがつ食べる／ぶらぶら暮らす／へらへら笑う

ゆえに，Type 1 の擬態語は ACT の様子を具体的に表す副詞要素であると考えられる。

(37) Type 1 の LCS
「する」の LCS 鋳型：[EVENT x ACT]
擬態語の LCS 内容：<Manner: α>
→ 擬態語動詞全体の LCS
[EVENT x ACT$_{<Manner_\alpha>}$]
x が　あくせく　する

a. Manner: α は各々の擬態語に特有の様態を表す。
b. 動詞「する」自体の LCS が [x ACT] であり，そこに擬態語の様態が付け加えてられて，文全体の意味が解釈される。
c. x が統語構造の主語に対応する。

Type ２：赤ちゃんの背中をトントンする。[働きかけ他動詞]

特徴１：他動詞で，主語が対象物に意図的に働きかけることを表す（x ACT ON-y）。

(38) どんどん（壁をドンドンしながらやけ酒を飲んだ），ぐりぐり（仙骨をグリグリする器具），ふーふー（甘酒をふーふーしながら飲む），くちゃくちゃ（ガムをくちゃくちゃする），ぱんぱん（ベランダに干した布団をパンパンする），ぺんぺん（自分で自分の顔をペンペンした），とんとん（赤ちゃんの背中をトントンする），つんつん（猫をつんつんするための「つんつん棒」）（ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ例）

特徴２：このタイプの擬態語は，「たたく」「こする」「つつく」など ACT ON 動詞を修飾する様態副詞として用いられることが多い。

(39) 壁をドンドンたたく／ガムをくちゃくちゃ噛む／猫をつんつんつつく

特徴３：「たたく，蹴る，こする，突く」のような語彙的な ACT ON 動詞と同様に，対象物の変化は含意しない（結果述語が付かない）。

(40) a. 彼女は布団を（*平たく／*ペシャンコに）パンパンした。
b. 子供はガムを（*柔らかく／*ペトベトに）クチャクチャした。

● ここで注意したいのは，「する」という動詞単独では，働きかけ他動詞（ACT ON）の用法がないことである。

(41) *（ドンドンと）壁をする（「壁をたたく」という意味で不可）
*（クチャクチャと）ガムをする（「ガムを噛む」という意味で不可）

従って，「する」自体は ACT だけで，ON-y を持っていない。ON-y は，「パンパン」などの擬態語から提供されると考えられる。更に，これらの擬態語は，動作の様態というよりむしろ，接触や打撃によって生じる音を表す。そこで，このタイプの擬態語は ON（つまり接触・打撃）の様子や音声を表すものと分析できる。

(42) Type 2 の LCS
「する」の LCS 鋳型：[EVENT x ACT]
擬態語・擬音語の LCS 断片： ON<Manner: α> y
→ 擬態語動詞全体の LCS
[EVENT x ACT ON$_{<Manner_\alpha>}$ y]
x が　ドンドンする　壁を

・x 項が統語構造の主語に，y 項が目的語に対応する。

Type ３：町をうろうろする。[場所移動動詞]

(43) ぶらぶら（主婦が商店街をぶらぶらする），うろうろ（放課後，校内をうろうろする），ちょろちょろ（男子学生が女子寮の周りをちょろちょろしている），うろちょろ（学校の前をうろちょろする），ごそごそ（ハンドバッグの中をごそごそする），きょろきょろ（周りをきょろきょろするな）

特徴１：主語がヲ格経路を不特定方向に移動する。移動物は主語全体のことも，主語の身体部分のこともある。

(44) a. 手の移動：バッグの中をごそごそする。
b. 視線の移動：あちこちきょろきょろする。

特徴２：このタイプの擬態語は，様態副詞として用いられると，「ぶらぶら歩く，うろうろとうろつく」などの位置の移動や，「きょろきょろ見渡す」のように視線の移動を表す動詞と一緒に用いられる。

特徴３：通常の移動様態動詞と同じく，移動経路をヲ格で表すが，Goal（最終的な着点）とは共起しない。(Cf. Kageyama 2003, 2004c)

(45) a. 語彙的な移動様態動詞：私は夜の新宿を（*待ち合わせ場所に）さまよった。
b. 擬態語動詞：私は夜の新宿を（*待ち合わせ場所に）うろうろした。

特徴４：「する」単独では，移動の意味用法はない。

(46) *うろうろと公園をする。
*ごそごそとバッグの中をする。

従って，移動の概念と，特定の方向を持たない経路は，擬態語から提供されるものと考えられる。

特徴５：主語の意図的な移動を表し，無生物主語は不適格になる。

(47) a. ネズミが台所をチョロチョロしている。
b. *水が（溝を）チョロチョロしている。

☞「する」がもともと ACT ないし CONTROL の LCS 鋳型を提供するから，無生物の移動には成り立たない。

(48) Type3 の LCS
「する」の LCS 鋳型：[EVENT x CONTROL […]]
擬態語の LCS 断片：[EVENT x MOVE<Manner$_{\alpha}$> [Route]]
→ 擬態語動詞全体の LCS
[EVENT x CONTROL [EVENT x MOVE<Manner$_{\alpha}$> [Route]]]
x が　うろうろ　する　繁華街を

・x 項は統語構造の主語に，Route は移動の経路を表すヲ格名詞句に対応。

Type ４：がっかりする。[心理動詞]

特徴１：自動詞で，主語の心理状態の変化を表す。これらの擬態語は，動作の様態ではなく，主語が経験する心の状態そのものを表す。たとえば「びっくり」は驚いた状態，「がっかり」は落胆した状態。そのため，様態副詞としては用いられにくい。

(49) *びっくり（と）驚いた／*ひやひや（と）心配した／*しょんぼり（と）落胆した

特徴２：感情の対象(Target of emotion: Pesetsky 1995)をニ格名詞句で表すことができる。

(50) あたふた（予想外の結果にあたふたした），びっくり（突然の悲報にびっくりした），ひやひや（初心者の運転にひやひやした），ひやっと（思わずひやっとした），いらいら（返事が来ないのでいらいらする），かっか（彼はすぐにかっかする），がっかり（店員の横柄な態度にがっかりした），はらはら（試合を見てはらはらする），むかっと（相手の態度にむかっとする），ぷっつん（我慢できず，彼はぷっつんした），しんみり（音楽を聴いてしんみりする），しょんぼり（しょんぼりするなよ）

特徴３：「する」自体は，この用法のニ格を取らない（*私はしんみりと，その知らせにした）。従って，擬態語が特定の心理状態と感情の対象の両方を提供していると考えられる。

特徴４：意味と音声の写像性（iconicity）
Type 1, 2, 3 の擬態語は反復形がほとんどであるが，Type 4 は –ri 形（びっくり）ないし-to 形（ひやっと）が多い。反復形は時間的な継続を示唆するのに対して，-ri や-to は出来事の区切れ（境界）を示唆し，アスペクト的には変化（BECOME）を含んでいると考えられる。

(51) Type 4 の LCS
「する」の LCS 鋳型：[EVENT x EXPERIENCE […]]
擬態語の LCS 断片：[EVENT BECOME [STATE x BE AT-[PSYCH.STATE<Manner$_{\alpha}$> ABOUT-z]]]
→ 擬態語動詞全体の LCS
[EVENT x EXPERIENCE [EVENT BECOME [STATE x BE AT-[PSYCH.STATE<Manner$_{\alpha}$> ABOUT-z]]]]

・x 項が統語構造の主語に，ABOUT-z はニ格名詞句（感情の対象）に対応する。

B グループ

Type ５：頭がずきずきする。[生理的感覚動詞]

話者の生理的な感覚を表し，Type 4 と似ているが，重要な点で異なる。

(52) くらくら（酸素不足で頭がくらくらする），がくがく（緊張で膝ががくがくする），がんがん（二日酔いで頭ががんがんする），ひりひり（唐辛子で舌がひりひりする），ふらふら（でんぐり返しをして，頭がふらふらする），むずむず（花粉症で鼻がむずむずする），しょぼしょぼ（モニターの見過ぎで目がしょぼしょぼする），ちくちく（化繊のシャツで皮膚がチクチクする），わくわく（期待で胸がわくわくする），じんじん（引っぱたかれて，ほっぺたがじんじんする），ぞくぞく（スリルで背筋がぞくぞくする），ぞくっと（スリラー映画を見て，背筋がぞくっとした），ずきずき（二日酔いで頭がずきずきする）

特徴１：現在形で用いられると，話者の現在の身体的感覚を述べ，名詞修飾用法の現在形も現実の状態を描写する。

(53) a. （私は）頭がずきずきする／膝ががくがくする／背中がひりひりする。
b. がくがくする膝，ひりひりする背中

これは状態動詞の特徴である。

(54) a. 状態動詞
金庫の中に大金がある／金庫の中にある大金
b. 非状態動詞：現在形は習慣ないし近い未来
彼は毎日よく働く。荷物はあす来る。

特徴２：現在形で使われたとき，ガ格名詞句（主語）は話者の身体を指す。他人には使えない。

(55) *彼は／あなたは，頭がずきずきする／胃がむかむかする／背中がひりひりする

これは心理・生理表現の特徴である。

(56) a. 私は頭が痛い／頭が痛む／めまいがする。
b. *彼は頭が痛い／頭が痛む／めまいがする 。

特徴３：「ドキドキ」は心臓，「ヒリヒリ」は皮膚，「しょぼしょぼ」は目というように，擬態語と身体部位との選択関係がかなり決まっている。このことから，特定の身体部位名とその異常な動きの様態は，擬態語そのものによって提供されると考えられる。

以上から，このタイプの擬態語は次のような意味構造を持つと考えられる。

(57)「どきどき」の LCS 断片

x's HEART MOVE<Manner: THROBBING>

(57)の MOVE（動き）は，場所の移動ではなく，固定された位置における動きを表す。

(58)「動き」の表示方法

	一地点での動き	場所の移動
Jackendoff	x MOVE	x GO
本稿	x MOVE	x MOVE [Route]

(59) a. 一地点での動き（移動経路がない）
家でぶらぶらする。
b. 場所の移動（移動経路がある）
公園をぶらぶらする。

(60) Type 5 の LCS
「する」の LCS 鋳型：[STATE x COGNIZE […]]
擬態語の LCS 断片：[EVENT body-part MOVE <Manner$_\alpha$>]
→ 擬態語動詞全体の LCS
[STATE [Spk] COGNIZE
[EVENT Spk's-[BODY-PART] MOVE<Manner$_\alpha$>]]
(私は)　頭が　　ズキズキ　　する

仮に，COGNIZE という意味述語を想定する。これは，主語の内的な生理的・心理的な知覚・認識・判断を表す状態述語。「思う，考える」などの動詞にも有効（？）。

その主語は，典型的に話者（Speaker; Spk）に限られ，Spk は定項（constant）であるから，語彙的に抑制されて統語構造に現れない。その結果，身体部位がガ格主語として現れる。

なお，語用論的には，そのような生理状態をもたらすなんらかの原因が存在するが，これは LCS には含めないでおく。

(61) a. 二日酔いで頭がガンガンする。
b. スリルで背筋がゾクゾクする。

Type 6：椅子がぐらぐらする。[物理的知覚]

(62) がたがた（立て付けのわるい玄関の戸がかたがたする），がたぴし（この橋，がたぴしするけれど渡っても大丈夫かな。阿刀田・星野 p.39），ぎらぎら（屋根がぎらぎらして，まぶしい），ぐらぐら（この椅子は，ちょっとさわっただけでも，ぐらぐらする），じとじと（部屋の中がじとじとする），ちらちら（モニターの画面がちらちらする），べとべと（汗でシャツがべとべとする）

特徴１：Type 5 と異なり，主語の身体部位でない物体を主語に取る。
特徴２：現在形で用いられてその物体の現実の動きを表す場合，その判断は話者による。
(63) a. あれ？　この椅子，ぐらぐらする。(→話者が実際に椅子に触って，判断している。)
b. このクリーム，すごくべとべとする。
→ Type 5 の概念構造から，Body-part の指定を取り除いた構造と推測される。

特徴３：そう判断するためには，話者が直接，その物体に触れるなどの行為が必要。視覚による判断では使いにくい。
(64) a. 絹は，{さわると／*見ただけで} すべすべする。
b. 絹は，{さわると／見ただけで} すべすべだ（と分かる）。
(65) 写真を見ながら，
a. 子供の髪がびしょびしょだ！
b. *子供の髪がびしょびしょする！
(66) a. この部屋はむしむしする。
b. *この部屋はむしむしだ。
(67) a. (*)ドアの取っ手がブラブラする。(Tsujimura)
b. ドアの取っ手がグラグラする。
ブラブラは視覚による認識のみ。

(68) Type 6 の LCS
「する」の LCS 鋳型：[STATE x COGNIZE […]]
擬態語の LCS 断片：[EVENT y MOVE <Manner$_\alpha$>]
→ 擬態語動詞全体の LCS
[STATE [Spk] COGNIZE
[EVENT y MOVE<Manner$_\alpha$>]]]
椅子が　　グラグラ　する

●現在の実際の出来事ではなく，主語名詞の恒常的性質（個体レベル叙述）を表すこともある。
(69) a. この椅子は，ぐらぐらするから，座るときは気を付けて下さい。
b. ぐらぐらする椅子／ちくちくするセーター／べとべとするキーボード
(70) Type 6 の擬態語動詞が主語名詞の属性を表す場合の LCS
λy [**Gen**$_x$ [x^ COGNIZE [y MOVE<Manner$_\alpha$>]]
(Gen=generic operator)
つまり，「y は誰がやっても，ある特定の動きをするという性質を持つ」。x は語彙的に束縛されるので，統語構造には現れない。(^印は，抑制 suppression)

(71) この椅子は　　グラグラする。
SUBJECT$_y$　　PREDICATE: λy [**Gen**$_x$ [x^COGNIZE [y MOVE<Manner$_\alpha$>]]]

もう１つ，注意したいのは，「ている」が付いた場合。
(72) a. ドアの取っ手がブラブラしている。(*する)
b. 台風で切れた電線がブラブラしている。(*する)

(73) 「テイル」の LCS；基体動詞の下位事象を前景化
[STATE y BE AT-[Subordinate Event …]]
(74) 「ブラブラする」の LCS
[STATE x COGNIZE [EVENT y MOVE<Manner $_\alpha$>]]
→ 「テイル」による下位事象の前景化
[STATE y BE AT-[EVENT y MOVE<Manner $_\alpha$>]]

Type 7：味があっさりしている。[主語の属性描写]

(75) あっさり（スープの味があっさりしている），だらだら（会議はいつもだらだらしている），どろっと（トンカツソースはどろっとしている），がらんと（教室ががらんとしている），がっしり（彼は体格ががっしりしている），ぎすぎす（人間関係がぎすぎすしている），ごちゃごちゃ（彼の文章はごちゃごちゃしている），ふんわり（布団がふんわりしている），きびきび（少年は態度がきびきびしていた），でこぼこ（この道はでこぼこしている），こんもり（その山はこんもりしていた），くりくり（目がくりくりしている），おっとり（あの人は性格がおっとりしている），ぱっちり（目がぱっちりしている），ぽっちゃり（彼女はほっぺたがぽっちゃりしている）

特徴１：Type 5, 6 と同様に，話者の判断に基づく描写。「このスープは，味があっさりしている」という文が成り立つためには，話者が実際に飲んでみることが必要。このことから，LCS では COGNIZE が仮定できる。話者の作用がない場合は，「～だ」という形容詞になる。ただし，Type 5, 6 と異なり，Type 7 では，「山がこんもりしている」のように視覚による判断も含まれるようである。

特徴２：原則として「～ている」あるいは連体修飾の「～た」を伴い，主語名詞の恒常的な性質を描写する。（Hamano 1998）

(76) a. スープの味があっさりしている。
b. あっさりした味
cf. 味があっさりするまで....

主語の属性を表す点では，Type 6 と Type7 は似ている。しかし Type 6 は，連体修飾「ーた」では使えない。

(77)

Type 6	Type 7
電線がブラブラしている。	教室ががらんとしている。
*ブラブラした電線	がらんとした教室

☞ 連体修飾の「た」（しおれた花，さびた鉄）は，状態変化(BECOME [BE])を表す LCS において結果状態を焦点化する（金水 1994, 影山 1996）。Type 6 は BECOME を含まない，「–た」が適用しない。

(78) 連体修飾の「–た」の機能
... [y BECOME [y BE AT-STATE]]
→ λy [... [y BECOME [y BE AT-.STATE]]]

(79) Type 7 の LCS
「する」の LCS 鋳型：[STATE x COGNIZE […]]
擬態語の LCS 断片： [x BECOME [x's y BE AT-[STATE<Manner:$_\alpha$>]]]
→擬態語動詞全体の LCS
[STATE x COGNIZE [EVENT x BECOME [STATE x's y BE AT-[STATE<Manner:$_\alpha$>]]]

→ 「ている」「た」による結果の前景化
λx [... x BECOME [x's y BE AT-[STATE<Manner: α >]]]

・結果の焦点化によって，y 項がガ格主語となる。
・x 項は，y 項の「所有者」であるので，「大主語」として具現できる。
[このスープが [[味が あっさり]して]いる]
大主語 小主語

特徴３ ： Type 7 の擬態語はそれ自体で特定の状態を表す。

(80) Type 7 の擬態語は複合名詞の修飾部になる。
Type 7：あっさり味（のラーメン），さっぱり味，
ぽっちゃり顔，ふかふか布団，がっしり体型，
こんもり山，ふんわりケーキ（ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ例）
他のタイプはこのような名詞修飾ができない。
Type 4：*がっかり少年， *びっくり娘
Type 5： *ずきずき頭，*がくがく膝，*ぐらぐら奥歯
Type 6：*ちくちくシャツ，*ぐらぐらテーブル，
*じとじと部屋

● もし, Type 7 の擬態語が状態(State)であるとすると，「する」との結合において問題が生じる。一般に，「する」は補部に出来事を選択し，直接，状態を取ることはできない。

(81) a. 急に｛地響き／めまい｝がした。(「地響き，めまい」は出来事(Event))
b. *急に｛静寂／病気｝がした。(「静寂，病気」は状態(State))

ここで注目したいのは，Type 7 の擬態語は他のタイプと形態的に異なり，ほとんどが「と」を取ることである。

(82) あっさりとしている，さっぱりとしている，
ふんわかとしている，ぽっちゃりとしている，
がっしりとしている，おっとりとしている

(83) ぼてっとしている (*ぼてっしている)，どろっとしている (*どろっしている)，がらんとしている (*がらんしている)，しーんとしている (*しーんしている)

なぜ，このタイプは「と」を取るのか？ (83)のような場合は音韻的な理由が考えられるが，(82)のような例では「と」を挿入するための音声的な理由は考えられない。

☞「と」は，通常，補文標識として主節と従属節の間をつなぐ役目を持つが，Type7 の擬態語では，LCS において，擬態語の状態性と「する」が要求する出来事性とのギャップを埋めるための橋渡しの役目を果たす。

(84) [[STATE あっさり] ↑ EVENT] する
と

(85) 「と」の機能：State を Event にタイプ変換する。
[STATE x BE AT-z]
⇒ [EVENT BECOME [STATE x BE AT-z]]

第４節のまとめ：
擬態語動詞の意味構造は特別なものではない。

1. 擬態語動詞の意味について
擬態語動詞の語彙概念構造は，「する」の LCS 鋳型に擬態語の意味構造を組み込むことで得られる。その結果として得られる LCS は，通常の語彙的動詞（単純語，複合語）と特に変わりがない。すなわち，Tsujimura の主張に反して, 擬態語動詞を説明するために特別な構文文法を持ち出す必要はなく, 概念構造理論で処理できる。

2. 擬態語動詞の統語構造について
擬態語動詞は，通常の動詞と同じように主語の取り方やアスペクトにおいて２つのタイプに分かれる。A グループは活動，心理的変化，働きかけ行為，意図的な移動を表し，ACT，CONTROL，EXPERIENCE の主語（ｘ項）が統語構造の主語に対応する（非能格動詞または他動詞として機能）。他方, B グループは，知覚・認識をおこなう主語（COGNIZE の主語。外項）が抑制されて，状態，変化，非意図的な動きが前景化される。その結果, 対象物である内項が主語になる（非対格動詞として機能）。
前掲(33)で図示した統語構造において，A グループのガ格主語が「外項」の位置にあり，B グループのガ格主語は「内項」の位置にあることは，統語的な証拠で立証できるが，ここでは省略する。

５． 擬態語動詞の統語的な限界

これまでは，擬態語動詞が通常の語彙的動詞と基本的に違いがないことを強調したが，文法的に重要な違いが１つ指摘できる。それは他動詞用法に関してである。

(86) 足をブラブラしないで座りなさい。(Tsujimura 2001)

筆者には，(86)の例は不自然で，「足をブラブラさせる／させない」という使役形を用いるほうが自然である。このような用法をインターネットでランダムに検索してみると，単なる他動詞形より，使役形のほうが３倍ちかく多いことが分かる。

(87) 使役変化の表し方
a. 足をばたばたする（約25%）／足をばたばたさせる（約75%）
b. ゴキブリ体操というのは，仰向けに寝て手と足をぶらぶらする（約25%）／手足をぶらぶらさせる（約75%）
c. 歯をかちかちする（約20%）／歯をかちかちさせる（約80%）
d. 金魚は口をぱくぱくする（約25%）／口をぱくぱくさせる（約75%）
e. 目をぱちくりする（約15%）／目をぱちくりさせる（約85%）

新しい擬態語動詞を作ってみても，使役変化の意味では受け入れられないと思われる。
(88) a. *けんかで，相手の顔をボコボコした。(「ボコボコにした」ならよい)
b. *九州の人なら，ラーメンのスープをもっとコッテリする。(「コッテリさせる」ならよい)
c. *靴は，いつもピカピカしなさい。(「ピカピカにする」ならよい)
ところが，「する」そのものには状態変化使役の意味があり，その場合はヲ格が成立する。
(89) 彼女は息子を医者にした／髪を短くした。

● なぜ，擬態語動詞は状態変化使役の他動詞になりにくいのだろうか？
一般に，日本語でヲ格が現れるのは次の３つの状況である。
(90) a. ACT ON の対象（壁をたたく）
b. MOVE が選択する移動経路（公園を散歩する）
c. 使役変化の対象（ビルを建てる）
既に見たように，（90a）と（90b）に相当する擬態語動詞は存在する。
(91) 90a 型 (Type 2)：背中をトントンする。(ON-y のヲ格)
90b 型 (Type 3)：繁華街をうろうろする。(移動経路)

先に示した LCS によれば，この２つのタイプでは，擬態語そのものが，働きかけないし移動経路を表している。
(92) Type２ ： ON<Manner: α> y
Type３ ： MOVE<Manner: α> [Route]

言い換えると，「背中をとんとんする」の「背中を」と，「繁華街をうろうろする」の「繁華街を」は，それぞれ，擬態語によって与えられる語彙的な固有格 (inherent case) であると考えられる。
一般化して言えば，擬態語動詞でヲ格が現れるのは，擬態語そのものが与える固有格の場合だけに限られる。普通の「する」ならヲ格が取れるが，擬態語動詞として用いられた場合の「する」は，一人前の LCS ではなく，不完全な LCS 鋳型しか持たない。
Type 1 から Type 7 までの「する」の LCS 鋳型だけを整理すると，次のようになる。
(93) Type 1: [EVENT x ACT<>]
Type 2: [EVENT x ACT [...]]
Type 3: [EVENT x CONTROL [...]]
Type 4: [EVENT x EXPERIENCE [...]]
Type 5: [STATE x^ COGNIZE [...]]
Type 6: [STATE x^ COGNIZE [...]]
Type 7: [STATE x^ COGNIZE [...]]
これらはすべて，いわゆる上位事象だけを示し，下位事象は持っていない。ところが，使役変化の対象(Theme)は下位事象（特に，BE の主語）として現れる。そのため，仮に使役変化他動詞の擬態語動詞を作っても，ヲ格がどこからも提供されないということになり，擬態語動詞を使役他動詞として用いると，不適格と判断される。
言い換えると，擬態語動詞の他動性(Transitivity)は非常に低く，これが，一般の語彙的動詞との大きな違いとなる。
ただし，ヲ格の成立を助けるような，低い他動性 (Hopper and Thompson 1980)を示す文法的環境に置いてやると，ヲ格の許容度が上がる。

(94) a. *そのとき，子供は足をブラブラした。
b. ?足をブラブラせずに，.... （否定，時制なし）
c. ? 子供は足をブラブラしながら... （時制なし）
d. ?もしすこしでも足をブラブラしたら... （仮定）
c. 足をブラブラするな！ （否定命令）

● ACT ON 他動詞と，使役変化他動詞との違いは，厳密な意味で「擬態語」ではないが，動詞語幹の反復形による動詞にも反映される。

(95) ACT ON 型の反復動詞（子供っぽいが，可能）
a. 頭をタオルでふきふきする。(拭く)
b. 足でうどんの捏ね粉をふみふみする。(踏む)
c. 文鳥がままのメガネをつきつきする。(突く)
d. すり鉢のごまをすりすりする。(擦る)
e. 子供の頭をなでなでする。(撫でる)
（いずれもインターネット例）
これに対して，使役変化他動詞の反復形は成立しにくい。

(96) a. *ご飯をたきたきする。(炊く)
b. *ボールをなげなげする。(投げる)
c. ? 水たまりの氷をわりわりしながら.... (割る)
d. ? 雑誌をきりきりしながら.... (切る)

●従来，ACT ON 型他動詞と使役変化他動詞は，あまり区別されず，どちらのヲ格も同じものとして扱われてきた。しかし，両者には次のような違いが見られる。

(97) 直接受身
a. 使役変化他動詞
家を建てた。／家が建てられた。
b. ACT ON 他動詞
主婦がふとんをたたいた。
*ふとんがたたかれた。
c.. ACT ON の擬態語動詞
主婦がふとんをぱんぱんした。
*ふとんがぱんぱんされた。

(98) 描写述語 (depictive predicates)
a. 使役変化他動詞：あき子が車を中古で買った。
b. ACT ON 他動詞：太郎が次郎を裸でなぐった。
(Koizumi 1994)
(99) a. *彼はバイクで，中古で駆けつけた。
b. *彼は家から，新築で飛び出した。

以上から，使役他動詞のヲ格が構造格であるのに対し，ACT ON 動詞のヲ格は，後置詞として PP 構造を形成すると考えられる。

6 結び

本稿では，擬態語動詞における「する」は，独立した動詞としての「する」とは異なり，不完全なLCSの骨組みだけを持つと分析した。

しかし一方，「Verbal Noun＋する」型の軽動詞構文における「する」とも異なる性質を持っている。なぜなら，軽動詞構文の「する」は，擬態語動詞の「する」と異なり，使役変化や状態を含めて，あらゆるタイプの事象を表すことができるからである。

(100) a. 活動：呼吸をする。
b. 使役変化：憲法を改正さえする。
c.. 状態：宇宙には，そのような星が存在さえする。

ここでは,「する」自体のLCSは, ほとんど空であり(Miyamoto 1999), 意味的・統語的情報はすべてVN (Verbal Noun) に依存する。

まとめ

LCSの中身からすると，日本語では少なくとも３つの「する」が認められる。

(101) a. 本動詞としての「する」：それだけで一人前のLCSを持つ。
b. 軽動詞としての「する」:LCSは実質的に空である。
c. 擬態語動詞（合成述語）としての「する」：上位事象を表すLCS鋳型だけを持つ。

(101 c)の合成述語としての「する」は，擬態語動詞だけでなく，(102)のような「する」等にも見られる。

(102) a. 彼女はきれいな手をしている。
b. 歌手はみんな美しい声をしている。(影山2004a)

参照文献

阿刀田稔子・星野和子(1995) 『擬音語・擬態語使い方事典』創拓社.

Boas, Hans (2003) *A Constructional Approach to Resultatives.* CSLI Publications.

Grimshaw, Jane (1993) "Semantic structure and semantic content in lexical representation," ms., Rutgers University.

Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese.* Kurosio Publishers.

Hopper, Paul J., and Sandra A. Thompson (1980) "Transitivity in grammar and discourse," *Language* 56: 251–299.

Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic structures.* MIT Press.

影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版.

Kageyama, Taro (2003) "Why English motion verbs are special," *Korean Journal of English Language and Linguistics* 3(3): 341–373.

影山太郎 (2004a)「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4(1): 22–37.

影山太郎 (2004b) 「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」，影山太郎・岸本秀樹（編）『日本語の分析と言語類型』3–23. くろしお出版.

Kageyama, Taro (2004c) "*All the way* adjuncts and the syntax–conceptual structure interface," *English Linguistics* 21(2): 265–293.

影山太郎（2005）「結果構文・結果複合動詞の産出と解釈」，大石強・西原哲雄・豊島庸二（編）『現代形態論の潮流』115-134. くろしお出版.

Kakehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, Lawrence Schourup (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*, 2 vols. Mouton de Gruyter.

金水　敏 (1994)「連体修飾の『～タ』について」，田窪（編）『日本語の名詞修飾表現』29–65. くろしお出版.

Kita, Sotaro (1997) "Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics," *Linguistics* 35: 379–415.

Koizumi, Masatoshi (1994) "Secondary predicates," *Journal of East Asian Linguistics* 3(1): 25–79.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations.* University of Chicago Press.

Miyamoto, Tadao (1999) *The Light Verb Construction in Japanese.* John Benjamins.

Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax.* MIT Press.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon.* MIT Press.

田守育啓・Lawrence Schourup (1999) 『オノマトペ：形態と意味』くろしお出版.

Tsujimura, Natsuko (2001) "Revisiting the two-dimensional approach to mimetics: A reply to Kita (1997)," *Linguistics* 39: 409–418.

Tsujimura, Natsuko (to appear) "A constructional approach to mimetic verbs," in Mirjam Fried and Hans Boas (eds.) *Constructional Approaches to Language.* John Benjamins.